
魔法の世界に来た死神

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の世界に来た死神

【NZコード】

N5641W

【作者名】

コウスケ

【あらすじ】

魔法の世界に来た犬とほぼ同じ。

プロローグ

神視点

やつほーい！皆さんお久しぶりじゃ！
つ、ご、ゴジラ、ワイノバーの使い手！弔、弔

この第一シリーズの主人公じゃ！

(違います)

この闇は何かが殺生丸の姿に魔改造をくわえ、九条仁の存在も完全コピーを見事に現世に作り、隠蔽工作が完了した。

本当にいはれるかひやひやした。。。

卷之三

というわけで・・・。

「ゴッドアイ！」

説明しよう！

ゴジニアイとは千里眼のようなもので、遠くの女子更衣室が見えるのだ！

ブス！

「ロロロロー。

突然目に刺すような痛みが走り、イスから落ちて転がりまわる、わ
し。

一体誰が・・・。

「神様、覗きは犯罪ですよ」

「おおー般若が般若があるーー！」

「いや・・・これは・・・保健体育の復習で・・・」

「だまれ、エロジジイ。次ぎやつたら田を潰しますよ？」

「ふふふ、そんな脅しでわしの・・・胸に燃えたぎる熱いパトスは・
・・」

ビリー！

「・・・あ」「

わしが起き上がるうと机に手を掛けて起き上がったのだがその際に
紙が破けてしまった。

その紙に書かれていた名前は・・・。

九条 仁

わしが隠蔽工作をした少年だった。
ははははは！

は・・はは・・は！
は――――――！

この日、わしの熱いパトスは鎮火した・・・。

1話 演劇の事故には、注意しよ。

—仁視点—

さて、ここはどこだ？

現在俺、九条 仁は森の中にいる。

俺に何があった！？

だって俺はさつきまで自宅のパソコンで一次創作の『バカと女装と召喚獣』を書いていたんだぞ。

それなのに腰に刀を差し、服も黒いロングコートに皮のズボン、白い手袋？のようなものに靴は紳士靴で森の中で放置プレイ。しかも何？髪は伸びているし、頭にへんなアクセサリーもついてる。はあ、どうしよう。

とりあえず、周りを・・・。

ズキン！

いっつ！！

一步踏み出したとたんに、頭に今まで感じたことのない痛みを感じた。

ズキン！ズキン！・・・

くそ！病気でもなったか・・・？

—斬魄刀—

死神が魔力を具現化させて作った刀。個人固有の能力や形状を持つ。魂の罪を洗い流し、次の世界へ送る。

通常は魔力の高さに比例した大きさだが、一定以上の魔力を持ついると大きさを制御できるらしい。

刀モード 始解 卍解が一般的だが、常に始解している常時解放型の刀もある。

始解に必要なのは斬魄刀との会話と同調、卍解に必要なのは具現化と屈服。。

直接攻撃系、鬼道系、炎熱系、氷雪系、流水系などの系統がある。斬魄刀のあらゆる能力は、一定以上の魔力があれば無力化できるらしい。

－鬼道－

死神が用いる魔術の一つ。決まつた言靈を詠唱したのち、術名を叫ぶことにより術が発動する。

相手を直接攻撃する「破道」（はびく）と、防御・束縛・伝達等を行つ「縛道」（ばくじく）があり、

それぞれに一番から九十番台まで様々な効果を持つ術が多数存在する。

数字が大きい術ほど高度で強力である。高位縛道の中には、ただ相手の動きを封じるだけでなく

その状態から更に攻撃ができる「封殺型」に移行できるものがある。

－ホロウ化－

虚の力を発現するための変化。虚化した各自の顔面には虚の仮面が出現し、魔力・気が飛躍的に向上する。

これにより身体能力や魔力や気を使用した技の威力を強化できる。

などなどの戦闘に関する知識や戦闘技術を頭に刷り込まれていく。そして体の事情を把握すると、痛みがウソのようになくなっていた。情報によると戦闘している時や普段生活する中でも

魔力とかまったく感じさせないようすに操作できるらしいが・・・。
俺、完璧に人外だな・・・。

死神？人間？からバケモノになつたり、最終的には次元を超えた強さを手に入れるし・・・。
無月つて技をやつたらここいら一体が大変な事になるな・・・。
しかも時間停止つて・・・。
もう何も言つまい。

それにしても、こんな状況だつていうのに俺、なんだか馴染んできたつていうか、自分に
違和感感じなくなってきたんだよね。
(靈体ではありませんので靈圧ではなく魔力になります)

さて、町を探しますかね。

町を探すため瞬歩という歩法をつかい、飛びまくる。

初めは、空間移動をしようと思つたが地形が分からぬために却下した。

でも、さすがチートボディだ、全然疲れない。
30分でかなりの距離を飛んでしまつたようだ。

後ろを振り向いても、もう俺が居た森は見えない。
うん、意外とスーパーマンになったみたいで嬉しいかもしれない。
そして飛び回つたおかげでついに町を発見した。

町はビルなどは建つておらず、家は全部、木造だつた。
まるで、昔のイギリス？ヨーロッパ？みたいな感じだつた。
もしかして、俺はタイムストリップを！？(主人公は混乱しています。ちなみにタイムスリップです)

まあ、待て。

そう判断するのはまだ早い・・・。

とりあえず町に潜入しよう！

・・・・・

怪しまれる事は無く、普通に入れた。

それにしても人が少ない。
どうしたんだ？

「おい！教会で吸血鬼を火あぶりにする時間だぞ！早く見に行こう
！」

「ああ、今行くよ！」

一人の男が友人の男とそんな会話をしながら、町の教会があるらしい場所に走つていった。

へ？吸血鬼？火あぶり？

何かのドッキリだらうか？もしくは祭りの演目？教会のイベント？
まあ、とりあえず見に行つてみよう。

・・・・・

「皆さん！ようこそ、我が教会へ！

そして、じ覧ください！これが我々が捕まえた、魔女にして吸血鬼
のバケモノです！」

「うそー！」

「普通の女の子にしか見えんが・・・・

「本当に魔女なの？」

教会の前では壇上がありそこには神父のおひれんが演説のよつなものをしており、

木材でくくりつけられて猿轡をつけられている、金髪の少女を魔女にして吸血鬼とか言つてゐる。

普通どっちかでしょ・・・。

ああ！わかつた！これは中世の魔女狩りと吸血鬼の話を、混ぜた演劇なんだ！！

つんー、町の感じといい本当に中央に来たんじゃないかと錯覚してしまつ。

「それでは、まず・・・」「これを」覗くだれ。

私の右手に持っているのは、醤油をなんか持つていそうなただのナイフです。

そしてこのナイフを、吸血鬼の足に刺します」

サク

「ぐ〜！」

ズ
ポ

「うぐー！」

「ナイフを抜いた後、この血をふき取り……」

ほら！御覧なさい！！刺した傷がなくなっています！！」

演出のためだらうか、金髪の少女は本当に痛々つて演技する。

しかし、演技だと分かついても、あんな小さな女の子がつらい顔をするなんて見て

るの辛いな・・・。

「バケモノだ！」

「殺しましょう・今すぐ！・！」

「殺せ！殺せ！」

これも演技の一部だらうか？

俺の周りにいた人たち、金髪の少女を本氣で殺す勢いでセリフを言つてゐる。

やべ、気分が悪くなつてきた。
ここから離れよう。

「それでは、聖なる教会の炎でこのバケモノを浄化しましょう」

「ん～～！！」

離れる時、女の子のうなり声が聞こえて来て、思わず振り返つてしまふ。

そして俺の目に映つたのは本物の火を少女がくくりつけられている十字架の

下のマキに点火した。

おそらく、最終場面なんだらう。

火は勢いよく、女の子のすぐ近くまで燃え上がつていつた。
はあ！ おいおい！ さすがにやばいんじゃね！ ？ 女の子本当に火あぶ
りにされるぞ！ ？

おそらく火の調整ミスだらう。

周りを見てみるが誰も助けようとしない。

もしかしてミスに気づいていない？

役者の人たちはOKだと思つてゐるのか…?
やばい！こうなつたら俺が…！

シユ！

バキ！

「へ？」

「　　は？」

瞬歩で十字架に近づいて、十字架を破壊して女の子を高速で助け、近づくときに勢いをつけすぎてしまつたせいが、そのまま教会の屋根へ行つてしまつた。

町の人たちは何が起つたのか理解できていなによつて、睡然としている

腕の中にいる少女に視線を落とすが、どいつもかげどのよつな怪我もなく無事だつた。

よかつた…、女の子にやけどの痕が出来たらかわいそつだし、本当によかつた。

「おおー…どうやら、吸血鬼は教会の炎に浄化されたよつです…！
みなさん、これからも教会の指示にしたがい、平和に…・・・

ん？…じつは演劇を続けるよつだ。

さすがプロと云つべきか？

しかし困つたぞ。

今降りていけば、せつかく持ち直したであつた劇が混乱するし…・・・

しかたがない。女の子には悪いがここから離れた場所においていう。

そうすれば、なんの苦もなく役者の樂屋に戻れるだろう。

そうと決まれば・・・。

俺は人目に付かない場所を探して、とんだ

－エヴァンジェリン視点－

私は5年前の誕生日に吸血鬼にされてしまった。

お父様達の仇は討てたが、その後はただ居場所をさがしてさまよっていた。

町に着いて、隠れるように住んでいたのだが。

数年経つても私が成長しない事に気が付いた人が、私の情報を教会の神父に売り。

神父は得た情報から沢山の傭兵を雇い、私を捕えさせた。

そして今日、私は火あぶりにされるらしい。

十字架にくくりつけられた上に、猿轡で口をふさがれた。

しばらくすると、町の人人が集まつてきて私の処刑を見に集まってきた。

町の人達が、かなりの数になってきたところで、神父が演説を始めた。

「皆さん！よしこそ、我が教会へ！

そして、『ご覧ください！これが我々が捕まえた、魔女にして吸血鬼のバケモノです！』

「うそ！」

「普通の女の子にしか見えんが・・・」

「本当に魔女なの？」

町の人たちは、私が吸血鬼にはとても思えないのか、疑いの視線で私を見ている。

そして、その視線を感じ取つた神父はナイフを取り出した。まさか！

「それでは、まず・・・コレをご覧ください。

私の右手に持つてるのは、皆さんが持つていそうなただのナイフです。

そしてこのナイフを、吸血鬼の足に刺します」

サク

「ぐ〜！」

ズボ

「つぐ！..」

「ナイフを抜いた後、この血をふき取り・・・
ほら！御覧なさい！！刺した傷がなくなつております！！」

神父は私の足を刺し、傷が塞がつたタイミングで刺した所の血布でふき取り、

私が吸血鬼である事を、町の人たちに知らしめた。

「バケモノだ！」

「殺しましょー！今すぐ！..」

「殺せ！殺せ！」

私が吸血鬼と分かると、疑いの目がなくなり殺意のこもった目になつた。

そして、神父は町の人たちの視線に満足したのか、教会からたいまつを持つてきた。

「それでは、聖なる教会の炎でこのバケモノを浄化しましょ！」

「ん～～！！」

やめて！いや！！助けて！誰か私を助けて！！
誰も助けてくれるわけがない。

そんなことは分かつていても私は・・・。
マキに油がぬつて、あつたのだろうか？

点火された炎は勢いよく燃えだした。

炎の熱で、苦悶の顔をしていると突然、熱かつた炎はなくなり。
屋根の上に誰かに抱きかかえられていた。

「おおー…どうやら、吸血鬼は教会の炎に浄化されたようです！！！
みなさん、これからも教会の指示にしたがい、平和に・・・」

ふと、下を見てみると、私が燃やさそうになつっていた、広場が見えた。

神父は私が居なくなつたのを教会の炎のおかげと思ったのかそれを町の人たちに自慢し、自分達教会の人間のいう事を聞くように演説をしていた。

どうやら、神父は私をダシに町の政権を奪うつもりのようだ。

そして、ふと私を抱きかかえている人物を見上げる。

私を抱きかかえているのは男性で、髪が長く頭に白いアクセサリーのようないしを付けている。

顔もカッコよく、まるで昔お母様が聞かせてくれた、御伽噺の王子様のようだった。

1話 演劇の事故には、注意しそう。（後書き）

朽木ボディになりました。

2話 吸血幼女を拾いました

－仁視点－

金髪少女を抱え、無事に人目につかない場所に到着した俺。
よし、誰もいないな・・・。

金髪少女を降ろし、何も言わず立ち去る。
何故なら教会から、ここまで飛んできたのだ、きっとこの少女は俺を
人外のバケモノと理解したに違いない。
この子が町の人たちに言われたら・・・。

『パパ！演劇の時にスپーマンが出たよ！』

『なに！？それは解剖して調べてみなくては・・・』

なんて事に・・・。

だから何も言わずに行く！

解剖はイヤでござる！

30分後

さて、あれからしばらく歩いて森の中。
問題は無いと、考えていたのだが・・・。

チラ

付けられてる！金髪少女にロツクオンされてる！

「・・・」

尾行は始めからわかつていたのだが、すぐに飽きて帰ると思いつにせずにいたのが悪かった。

いまここで、瞬歩して逃げたら確実に金髪少女は迷子になるだろう。
しかたがない、話しかけて家まで送るか……。

「少女、家に帰らなくていいのか？」

おや? 口調おかしくない?

これも、人外になつた影響？

それにしても俺
何様？かなり偉そーなんだけど

「……家は、ありません」

自分の口調に混乱しつつ少女の返答を待つが、

俺、やつちまた！？

たが、まだだ！ まだ俺は戦闘不能になつたわけではない！ きっとこの少女にも家族はいるはず！

キャンピングカー的なものなのかも知れない！

「家族はどうした?」

「一人とも・・・亡くなりました・・・」

俯いて、悲しそうな声を出す少女。

神様…僕が何かしましたか?

少女は、家も家族を失つてしまつた。

教会に預けられ、生活していた。

しかし、演技の事故が起こり、俺が助けた。

そこで、家族の思い出があつてつらい町にいるより、いい人そうな俺に付いて行こう？

こんな感じなのか？

ちょっと聞いてみよう。

「私に、付いてくるか？」

「はい！」

俺が聞いた瞬間、少女は俯いていた顔を上げて笑顔で俺に答えた。
「おお！まさかの大当たり！？」

周りからさんざんお前は鈍い、だの鈍感だの言われてきたが、
もう鈍感なんて言わせねえ！

少女はトコトコと俺の隣まで来た。
なんだろ？

「私、エヴァンジエリン・A・K・マグダエルです
よろしくお願ひします」

どうやら、自己紹介のようだ。

おお、さすが外国人だ。長い名前でいらっしゃる。

「九条 仁だ」

そして俺の口調はそつけないね。

九条 仁・・・家族が出来た！

スキル、ロリコンが習得できます。

習得しますか？

はい
・
いいえ

私を助けてくれた男性は私を降ろして、
何も言わず町の外へと歩き出した。
当ての無い私は彼の後を付いていく事にした。

30分後

歩いていた彼が私のほうに振り返り

「少女、家に帰らなくていいのか？」

と、質問をして来た。もちろん帰る家なんて私には無い。

「・・・家は、ありません」

「家族はどうした?」

「人とも・・・亡くなりました・・・」

お父様とお母様の事を思い出し、思わず俯いて答えてしました。

「私に、付いてくるか？」

「はい！」

私は彼の言葉に素早く反応し即答した。

私は、この言葉を待っていたのかもしれない。

私は、この人のような男性を待っていたのかもしれない。

吸血鬼になつた私に、この人は光をくれた。

私は、すぐに彼に横に並び、名を名乗つた。

「私、エヴァンジェリン・A・K・マグダエルです
よろしくお願ひします」

「九条 仁だ」

九条 仁。

仁さん、本当にこれからよろしくお願ひしますね。

エヴァンジェリンの初恋である。

－仁視点－

さて、エヴァを拾つてから数十年が経つた。
まあ、エヴァとの生活は楽しいよ。

兄様、兄様と懷いてくれるからな。

しかし、エヴァが吸血鬼だというのは驚いた。
あの町のイベントじゃなかつたようだ。

まあ、俺もバケモンだし、別に気にするような事はないしな。
でも、賞金稼ぎや魔法使いがうつとうじい。

あいつら、ゴキブリのように沸いてくる。

だから、俺達は誰の手の届かない、南洋の孤島で生活をしている。
それに、あいつらが来ても大丈夫なように強力な結界を島に張つて
あるしね、

防犯は完璧だ。

そして、俺は現在あるものを完成させた。
エヴァの作ったチャチャゼロがつらやましく、
俺も従者がほしいと思って地下にラボを作り、
従者を作つてみたのだ。

「・・・兄様、そいつはなんだ？」

おや、エヴァが来たようだ。

後で驚かそうと秘密にしてきたがちよつどいい、完成したし、見て
もらおう。

しかしエヴァよ、なんでそんなに俺を睨んでいるんだい？

「この者の事か？この者は・・・」

「初めてまして、エヴァ様。

私はネム。仁様の魔力により誕生した存在です」

「ケケケケケ、旦那ノ女カト思ッタゼ」

「説明をしてもうつか？」

「1時間後」

「なるほど、つまり兄様はチャチャゼロのような従者が欲しかったと・・・

私ならいつでも仮契約でも本契約でもしたのに（ぼそ）」

ようやく説明が終わりを告げ、開放された。

最後になにやらエヴァが小さな声で、何かを言つたようだが、精神的に疲れているため、聞き逃してしまった。

まあ、聞いても話が長くなりそうだし、黙つておくか。

その後、飯を食い終わった、俺は、いい事を思ついた。

そうだ、もっと従者を増やして話し相手を作ろ。

中にはきっとエヴァのお友達も出来るはずだし、どうせなら会社が組織でも作るか。

さすがに農業も飽きたし・・・、何でも屋みたいなことでもするかな？

そうと、決まつたら組織名を考えないとなあ・・・。

名前は・・・そうだなあ・・・。

仮面の軍勢・・・ヴァイザードなんてどうだう？

俺の魔力から作る従者だからか、ホロウ化で仮面が付けられるし。

それに、仕事中はホロウ化をさせておけば、パワーアップもするから早く仕事も終わるだう。

よし！たくさん従者を作るぞ！

－エヴァ 視点－

兄様について、いつて数十年が経つた。

初めは一人つきりで、楽しく旅をしていたのだが。

私が生きている事をどこかで知ったバカが魔法使い共に教えたせい

で、

私と兄様は追われる身となつた。

まあ、賞金稼ぎ共が来るたびに兄様に簡単に吹っ飛ばされていたが・
・・。

今更だが、兄様は規格外すぎる。

腕を横に振る、たつたそれだけで、人が紙屑のように飛んで行つてしまふのだから・・・。

ちなみに私が彼のことを兄様と呼ぶようになったのは、昔、とある街で男は兄様と呼ばれると

喜ぶらしいと聞いたからだ。

それから、根気よく、試してみて数ヶ月たつたのだが、結果は特に変化はなく、

そのまま定着してしまつた。

その後は、兄様の空間転移で南洋の孤島に移り住み。果物や野菜を育てながら、生活をしている。

ちなみに、私はこの島にいつ、敵が攻めてきても大丈夫なように、数年前手に入れた

ダオラマ球で魔法の修行と従者を作つた。

名前はチャチャゼロ、私の最高傑作にして、初めての従者だ。

兄様にチャチャゼロのことを報告すると、頭を撫でられ「頑張ったな」と言われた。

正直、子供扱いはもうしないで欲しいのだけど、心地よかつたので

何も言えなかつた。

それから数カ月後の現在。

兄様が私に何も言わずに、地下へと潜つて行つた。

何時の間にこんなものを・・・。

ご飯を呼びに行くついでに何をしているのか、聞いてみよう

私は地下の階段を降りて、部屋があるであろう扉に手を掛けて開けた。

するとそこには・・・。

「・・・兄様、そいつはなんだ?」

兄様の隣に黒い変わつた服を着た、兄様と同じ黒い髪の女が居た。

「」の者の事か?この者は・・・

「初めまして、エヴァ様。

私はネム。仁様の魔力により誕生した存在です」

は?この女は何を言つた?魔力から人が出来るわけが・・・。
いや、規格外の兄様なら納得が出来るな・・・。

「ケケケケケ、旦那ノ女カト思ッタゼ」

チャチャゼロ、お前はいつからここに居た?
まあ、今はそんなことはどうでもいい。
とりあえず・・・。

「説明をしてもらおうか?」

— 説明が終わり、仁の作ったログハウスの自室に居るエヴァ —

まったく、自分の魔力を元に魂をつくり、義骸とよばれる作った肉
体に定着
させるとは・・・。
いや・・・もう何も言つまい・・・。
今日は疲れた・・・お休み・・・。

3話 仮面の軍勢（後書き）

たぶん、後で見たら何これ？…と思ひでしよう。

4話 考えている事は皆一緒

－仁視点－

あれから、仮面の軍勢も人数がかなり増え、
家も城にリフォームした。

エヴァにもお友達が出来たようだし、よかつた、よかつた。
しかし、なんで従者は女性しか出来ないのだ？

そう、ウチの従者達は全員が女なのだ。

不思議な事に俺は女性体しか作れないようで、原因を見つけようと
頑張つたが、結局分からなかつた。

おそらく、俺の魔力か術式が問題なのだろうが・・・まあ、別にい
いんだけどね

皆、俺の家族なんだし。

後、仕事の方も順調で、かなりの数の外国の紙幣を稼いでいる。
もう、ウハウハだね！

調子に乗りすぎて國家予算ぐらい稼いじゃつたよ。

だから、しばらくは休業かな。

依頼も特殊なやり方じゃないと出来ないようになつていて、
ダミーの会社もあつて、絶対に見つけられることは無いだろう。
しかし、やることがない。

ただ、ぐーたらしているのもすぐに飽きるだろうし・・・

そうだ！エスパーダの誰かとエヴァで世界でも放浪しよう。

エスパーダ
十刃

難しい、依頼を受けるため、仮面の軍勢の中から選抜された、高い
戦闘能力を持つ十人で、

彼女達の体のどこかに特殊な刺青で、強い順番でNO1～10まで

の数字が刻印されており、

彼女達が見せようとしないかぎり、数字は表れない。

他の従者達には無い、（無いとは思うが、いじめ防止の為）しかし強い者が現れると入れ替えになる。

だが、実力が付けば再び戻る」とも出来る。

まあ、全員が女同士で仲がいいため、数字を賭けた、戦いは一度も起こっていないんだけど・・・。

ちなみに俺は〇で、エヴァに番号があつたら、40～50ぐらいになる。

さて、召集をかけるかな・・・。

「ネム、エスパード全員とエヴァを呼べ」

「はい、仁様」

近くに居た、ネムに頼んだ後、俺は会議室と書かれた、部屋に入り、自分の席に座る。
さて、どう話しかねおうか・・・。

—3分後—

召集から少し経つて、呼んだ全員が集まつた。

NO、1四楓院 夜一

「主殿、わしらを呼んだ理由はなんじゃ？」

NO、2志波 空鶴

「何か問題でもあったのか?」

NO、3 碎蜂 (ノースリーブ∨eʳ)

「仁様。問題が起きたのなら、この碎蜂にお任せください。命を賭けて問題となつたものを抹殺します」

NO、4 ティア・ハリベル (死神の格好をしています、仮面はない)

「碎蜂、問題に当たるのは、この私だ。お前の卍解は危険すぎる、この間も・・・」

NO、5 ネリエル・トウ・オーテルシュヴァンク (仮面なし、死神の格好をしている、顔の赤い模様?もない 大人∨eʳ)

「私は戦いよりも、ご主人様と・・・」

NO、6 卵ノ花 烈

「あらあら」

NO、7 松本 亂菊

「物騒な事いってるけど、まだそつと決まったわけじゃないわよ?」

「そつですよ、みなさん」

NO、8 雛森 桃

NO、9涅 ネム

「・・・」

NO、10井上 織姫（死神∨e）

「あはは・・・」

ふむ、みんな問題が起じたと思っていたところだ。
たしかに召集する時は、いつも仕事の話だけど・・・。

「今回、皆を召集したのは・・・。一時、仮面の軍勢の活動を中断
し、

私は世界を放浪しようと思つたからだ

「「「「「「「「「放浪！？」」「」「」「」「」「」「」「」「」

おお、皆驚いた顔をしている。

あのネムでさえ、ビックリしている様子だ。

「兄様！私は一言も聞いてないぞーーー！」

「今、初めて話した

エヴァは少し機嫌が悪いようだ。

もしかしたら夜一にまた、からかわれたのか？

「話はわかったがそれだけか？俺は主がそれだけで呼んだとは思え
ないんだが・・・」

「わしもじや・・・。たつたそれだけの事なら話に言えぱいい。
わしらエスパー^ダを集めたのは何か他にもあるんじやろ?」

話を聞いて空鶴と夜一はそれだけじゃないと本能で察したのか、俺に問いかける。

他のエスパー^ダもそれだけではないと分かっているのか俺の顔をじつと見る。

「ああ、そうだ。

エヴァとエスパー^ダの何名かは私と来てもらいたい。
残りは孤島の警備だ。行きたい者はいるか?」

まあ、付いてくるとしたら、物好きな空鶴や夜一に世話をしたがりのネムや桃に碎蜂ぐらいだろ・・・。

「「「「「「「行きますー(行くぞー!)」「」「」「」「」「」「」

おおーまさかの全員が行きたいとは・・・。
そんなに旅行したかったのか?

まあ、依頼で外に行くのとは違い、ショッピングが出来るとかお菓子が食べられるとか
女の子らしい理由からなのだろう。

— Hスパー^ダ + エヴァ —

『この旅行に乘じて・・・』

『全員を・・・出し抜く!-!』

全員、考える事と田代は・・・一緒にいた。

4話 考えてこむ事は皆一緒に（後書き）

頑張りました・・・。

後、もう少しで犬のほうが出来ます。

犬の更新は土日ぐらいになると思います。

5話 日本で大きな木を見つけました

－仁視点－

会議の後から本当に大変だつた。

夜一や空鶴が最後まで立つていた奴が、俺と一緒に行くと勝手に発言し、暴れようとしたのだ。

あわてて、六杖光牢で動きを止めた。

まったく、あいつ等は・・・。

その後も話し合いをしたのだが結局、決着はつかず・・・。

結局、一週間交代で、俺に付いて来る事になった。

一週間交代というのは、俺が依頼された場所に向かうために作つた、

穿界門

を使い、一週間経つたら付いてきたエスパー・ダは他のエスパー・ダと交代すると

いう提案だ。

この提案のお陰で殺伐とした雰囲気はなくなり、順番も無事にジャンケンで決まった。

こうして、俺とエヴァ・アとエスパー・ダのメンバーで放浪の旅が始まつた・・・。

－三日後－

現在俺達は、日本に来ている。

ここに来て、本当に俺はタイムスリップしたのだと自覚してしまう。何故なら東京や埼玉が無く、村や昔ながらの町が広がつていたからだ。

それにも、何だ?このデカイ木は?

埼玉が出来るであろう、土地に来ている俺たちなのだが、高い異質な魔力を感じた

俺達は、魔力の発生している場所に来た。

しかし、そこには人は居らず魔力を放つ、大きな木が一本だけが、立っているだけだつた。

何だこれ？こんなものは未来には無いはずなんだけど・・・。もしかして俺は、時代だけじゃなく世界も飛んだ？

「それにしても、大きい木じゃなー」

「ああ、コレが桜みたいな花を咲かせたらきっと綺麗だろうな。そんで、それを見ながら酒を飲んだら・・・」

夜一と空鶴が感想を漏らす。

確かに空鶴の言つように、桜の花を咲かせたら、綺麗に違いない。

「兄様。ここに穿界門の予備を設置して私達の土地にしないか？侵入者が来ないよう結界も張つておけば完璧だろ」

「ふむ・・・」

たしかにエヴァの言つ通りにこここの土地を俺達の物にすれば、この木の観察が出来る。

しかもだ、土地も広く桜のような花を咲かせるのだったらここで皆とお花見も出来る。

よし！ここに結界を張つて、穿界門を設置するか。

後、こここの警備のために何人かここに呼んで・・・。

こうして、放浪三日目にして、新しい土地をゲットした。ついでに、エヴァが一人で何かにやる気になつてているのが気になつたが何があつたのだろうか？

－エヴァ 視点－

まつたく！兄様は何を考えているのだ！？
放浪なら私達一人でいいではないか！
と、今更言つてもしようがない。

しかし、しかしだ。

始めの一週間が夜一と空鶴なんだ！！

あの二人はバカではないのだが時々、調子に乗つたり、悪乗りをする時があるから

少し苦手だ。

でも、あと4日の我慢だ。

4日までば、ネムとティアが来る。

あの一人は冷静で常識があるから、好ましい。
だが、ネムの奴はもう少し、感情を表にした方がいいと思う。
まあ、それはもういいとしてだ。

何だ、この木は・・・？

でかいばかりではなく異質な魔力を発している。

それに、私の勘ではそれだけではないような気がしてならない。

「それにしても、大きい木じゃなー」

「ああ、コレが桜みたいな花を咲かせたらきっと綺麗だろうな。
そこで、それを見ながら酒を飲んだら・・・」

あの二人は時々本当にバカなのでは？と思つてしまつ。
たしかにエスパードである、あの一人や兄様からすれば、たいした
事のない

小さな存在なのかもしれないが・・・。

「兄様。ここに穿界門の予備を設置して私達の土地にしないか?
侵入者が来ないよう結界も張つておけば完璧だろ」

「ふむ・・・」

私がここに穿界門を設置して、自分達の土地にしおりと壁とい、
兄様は考えるようにあごに手を乗せる。
おそらく私の研究したいという本音を察して考えてくれているのだ
らう。

「わかった、いいだらう」

「ありがとう!兄様!~!」

やはり、兄様は優しい。

よし!私のわがままを聞いてくれた兄様の役に立つ情報を見つけて
みせる!!

こつして、私の研究の日々が始まった。

「仁視点」

魔力の宿つた木。

俺達は世界樹と呼んで、旅を一時的に中断し、百年ほど研究した。

そこでわかつたのが、22年周期でたまつた魔力が人の心に作用される

物だと判明した。

さて、世界樹を調べるために百年費やしたが、もうそろそろ旅を始めてもいいだろ。

孤島に4人、世界樹の屋敷にも4人のエスペーダと他の従者達に警備させて、旅に出よう。

えっと、たしかネムとティアだつたかな？

あの二人とエヴァを連れて、明日にでも旅立と。

「仁様、侵入しようと結界に攻撃をしている、魔法使いだと思わしき不審者を発見しました。指示をお願いします」

「あ、面倒な・・・。

「適当に相手して、事情を聞いて報告しろ」

「ハツ」

さて、旅行の準備を整えつつ、珍しい魔法世界にでも行くか。
あ、エスパー・ダに出るなって言つたの忘れてた。
まあ、殺しはしないだろう・・・たぶん・・・。

「メガロメセンブリアから来た魔法使い視点」

まったく、私のような立派な魔法使いが何故このよつた地味な仕事をしなければならないのだ！

私の任務の内容は、旧世界に存在する膨大な魔力が宿った木の土地を確保する事。

とても単純な任務だ。

しかし、旧世界には魔法文明は限られた地域しかないはずなのに、木があると報告された場所にはとても強力な結界が張られている。

土地の管理者が居るのか？

私の魔法が効かない様子から、かなりの魔力を持つものが張つたのだと予想が付く。

くそ！私をバカにしあつて！！

自慢の魔法がまったく効いていない事実にイライラしていると、不気味な仮面を付けたピンク髪の少女？に似たような格好をした胸の大きい女が目の前に現れた。

なんだ一体？

「む～・・・、プルルン。あのおじさん雑魚だよ。戦つても面白くなさそう」

な！？なんだと！！

「やあねやあん。 いくら本当のことでも本人の田の前で言つたらダメだよ。

「おんなじ、おじさん」

正義の魔法使いである俺を怒らせたんだ！奴隸にしてた二ふに後悔させやるー！

「ウル・ドラ・ドラクリス！来たれ雷精、風の精。雷を纏いて吹き

雷の暴風！！

生意気な小娘どもに放たれる、私の魔法。
しかし・・・。

「じゅせき」

バ
シ
!

は？理解できなかつた。

そんなバカな！！蚊じやないんだぞ！！

「つまんない、私帰る！」

・・・もう、しょうがないな・・・。氣絶させてネムさんご渡そう

髪の長い女が一言喋ると、私の視界が暗転した。

ついてない・・・。

短すぎた為・・・おまけ

—Hグランジエリン視点—

ふははははは！ついに、ついに完成したぞ！—

私特性の年齢詐証薬！—

最近、兄様がそろそろ旅に出るかとぼやいているのを聞いて、急ピ

ツチで完成させた。

私のもてる全てを費やした、最高の魔法薬だ！—

これを使い、旅行先の夜で・・・。

はーはーはーはーはーはーはーはー！—

6話（後書き）

正直短いと思いますので、次回は長くしたいです。

7話 メガロメセンブリアと変態の小説

－仁視点－

まったく、旅行に行こうとした、とたんコレか・・・。

俺は現在侵入者である、男と話をしているのだが・・・。

「貴様ー！」の私にこんな事をしてタダで、済むと思つていいのか！？

と、自分の立場をわきまえず、偉そうな事をぶつけてくる。もういいや、面倒だ。

「イツの持ち物から、メガロメセンブリアの魔法使いと解かっているし。

直接行って、ここは俺達の土地だと説明する必要がありそうだ。まあ、旅行のついでだと思えば・・・。

「おい！無視をするな！貴様は・・・」

「だまれ！」

ボコ！

「ほーー！」

いつまでも、つるをかつたおっさんを殴り、黙らせた。

さて、つるといおっさんも黙らせたし、そつとエスペーダ数名を連れて

魔法世界に行くか。

「夜一、空鶴、ティア」

「「「はー」「」」

「今からこの男を連れて、魔法世界に行く

「「「了解」「」」

そして、俺達は穿界門へ・・・。
だが、穿界門の前にはエヴァアが居た。
何か用があるのか？

「兄様。行くのか？」

「ああ」

「せうか・・・」

ふむ、少し暗い雰囲気がある、俺は何かしたのか？
どうするー、どうすればいいー！お兄ちゃんはどうすればいいー！？

「その・・・無茶をするんじゃ・・・なーぞ」

タツ

そう言つて、エヴァアはどこかに行つてしまつた。
は？あのエヴァアが・・・。
最近反抗期気味のエヴァアが・・・。
ででででー！テレたのかー！？

何時フラグ踏んだ！？覚えてねえよ！
つて、そんなわけ無いか。

エヴァは照れ屋だからな。

恥ずかしさから、あんな言い方になつたに違いない。

「主は、今のは効いていない様子・・・」（小さな声）

「ふむ、どうやらツンデレが好きでは無い様じゃのう」（小さな声）

「ん？たしかツンデレって、千鶴の奴が書いている、
小説に出てくる単語だよな？意味は知らんが・・・」（小さな声）

後ろの方で、なにやら三人が話をしている。

何の話だ？

「まあいい、それよりも行くぞ」

「ああ」

「そうじやな」

「了解」

俺達は、4人+1で門を潜り、メガロメセンブリアに向かう。
しかしだ、エスパー・ダは大丈夫だとして、竜貴や他の奴らは大丈夫
なのだろうか？

正直不安だ、実力的には仮面の軍勢は全員が魔法使いで言う最強ク
ラスだが
不安になつてしまふ。

俺も随分の親ばか？シスコン？になつてしまつたものだ・・・。

まあ、悪い気分ではないな、うん。

「わい、ここから瞬歩で向かう」

「了解じゃ」

「早く帰つて、酒が飲みてえぜ」

「空鶴。お前は少し真面目になれ。
主に嫌われるや」

「う・・・」

多少「コント」のような会話をして、目的地に向かう俺達。
もちろん、ホロウ化をして向かう。

しかし、このおっちゃん起きないな・・・。

繩でぐるぐる巻きにした、おっさんはまだに気絶している。
まつたく・・・。

おっさんに呆れつつ進んでいくと、もう目的地の国が見えてきた。
たしか、以前に聞いた、ネムの情報によるところの国は連合国で
王は居らず、トップは元老院と呼ばれ、何人もいるらしい。
だが、この連合国は、黒い話が絶えなく危ない国であると囁き報告
も受けている。

なんでも、魔法使いがうつとうじいという理由で威力の高い魔法を
街中で使つたり、

人体実験をしたり・・・などなど。

そんな事を言つて、ゲートの近くまで来てしまつた。
見張りも居るようだし、どうやって入つたものか・・・。

—エヴァ視点—

「貴様！全然効果が無かったではないか！！」

私は先程、千鶴が書いている小説のセリフを試してみたのだが全然効果が無かつた。

奴の話し通りなら、萌えという感情が兄様に湧き上がり、私を抱きしめるはずだったのだが、特に何もされる事なく門を通りて行ってしまった。

「そんな事、私に言われても困るよ。

仁様がただツンデレが好きじゃないだけでしょう」

「じゃあ、兄様は何が好きと言つんだ」

「ふふふふふ！それが知りたくば、このR18千鶴スペシャルを読めば解かる！」

私は時々、こいつの頭には何かが寄生しているのではないかと思う。邪悪なオーラを放つ千鶴に一步、後ろに下がる。

「引かないでよ、エヴァちゃん！この本に書かれているのはどんな男も虜にする、セリフやー仕草がー全ての萌えが入っているの・・・ブフウ！！！」

「何、エヴァちゃんに変な事を吹き込んでんのよ、あんたは

本の説明をしている千鶴の腹に拳を叩き込む、竜貴。さすがの私も千鶴に同情してしまった。威力だった。

「実は、カクカクしかじかで・・・」

「なるほどね・・・でも！そんな如何わしい物は私が没収する！」

「黙りなさい、変態！」

竜貴の本氣?の一撃により沈黙する千鶴

この状況はトン突き立る糸を置いて
どこかに行ってしまった。

ピクピク・・・

現在私の状況・・・つまりこの変態を運ばなくては、いけないと?
とりあえず、今はそうしておいた方がいいと思い。

嫌たが魔法で変態を運んだ
まあ、あの本は、竜貴が処分

惜しいが、千鶴と兄様のカツプリングなんて読みたくないしな。

その頃の竜貴

「じ、仁様。こ、こうすればいいのか？」

自分の部屋の鏡に向かつて、本に書いてあるセクシーポースやセリフを

練習していました。

—碎蜂視点—

仁様と師匠である夜一様が空鶴とティア・ハリベルをつれて魔法世界に行ってしまった。

仁様、私も行きたかったです……。

「ちょっと碎蜂……なにイジイジしてんだ!? セツセツ組み手するぞ!!」

「ああ、わかっている」

仁様達が魔法世界に行ってしまった後、

目の前に居る 鰻屋 育美に組み手に誘われ、ネムを筆頭に技術開発局の連中が作った道場に来ている。正直、私はこの女はあまり好きではない。

同族嫌悪と言う奴だろうか?

この女は仁様の前では常識のある、おしとやかな女であるのだが仁様が居なくなつたとたんに男のようにガサツになる。

本人曰く 仁様にもつと好きになつて欲しいけど他はどうでもいい。とのこと、まあその気持ちは理解できるし否定はしない。

私も、愛しい仁様や尊敬している夜一様の前では従順だが、その他には

上から目線で話していたりしている。

私が何が言いたいのかと云つと、正直キャラが被るから氣に入らないのだ。

だが、気に入らなくてもコイツ仁様や夜一様と同じ、私の家族。だからキライになりきれず、道場で時々、組み手なんかをしている。

余談なのだが、なんでもこの道場はエスパー・ダでも壊れない道場とやらで、

NO、1の夜一樣の本氣の蹴りに耐える強度を誇っているのだとか・・・。

ガラ！

「あんた達！こんな所で汗臭い事やつてないで、魔法世界に行くわよーーー！」

毒ヶ峰リルカ

ドールハウスという珍しい鬼道を使う女だ。

性格に難があり、エヴァとよく似ている。

「ほら！呆けてないで、仁様たちを追うわよーーー！」

「「・・・」

この後、無言で魔法世界に行つた私は悪くない。

私はただ毒ヶ峰リルカに無・理・矢・理！連れて行かれただけだ。だから魔法世界で仁様や師匠である夜一樣に会つても問題は無い。全ての罪は毒ヶ峰リルカが被つてくれるだろう。

隣の育美を見てみると同じ考えにいたつたのか、目が笑っている。

しつこよつだが言つておいつ。

私は無理矢理、連れて行かれた。
悪いのは毒ヶ峰リルカ。

以上。

—仁視点—

さて、現在俺達は門番を殺氣をたたきつける」とで戻絶せ、進入したのだが・・・。

「荒んでいるな

「荒んでいますね」

「荒んでこむの?」

そう、空鶴、ティア、夜一の言ひ通り荒んでいるのだ。
簡単に言つと無法地帯。

ヤクザのような男達が歩いていたり、瘦せた子供が居たり。色々と酷い状態だ。

この光景を見て気分を悪くした俺達は国を中心部に向かって歩き出した。

すると、どうだらうか中心部に進めば進むほど町は綺麗になり、豊かになつていった。

始めに居たヤクザのような奴らはいないし瘦せた子供の姿も見えない。

なるほど、これが格差社会か・・・。

「主、こひり辺を灰にしてもいいかの?」

「極端ですが私も夜一に同意ですね」

「俺もだぜ、胸糞悪い」

たしかに、俺も差別感にはイラついているが暴れるわけにはいかない。

ここで暴れれば俺達は、犯罪者のレッテルを貼られ、追われる身となる。

そし なれば 僕達4人以外の家族はも 途悪が挂かる

「落ち着け、気持ちは分かるが、ここで暴れても何もならない。」

周囲に迷惑をかける力

「主・・・すまんの。我らもわかつてはいるのだが、思わず・・」

「すまねえな、でも……言つてくれてありがとよ」

「感謝いたします」

まあ、つこ口に出しちゃう事つてあるもんね。聞かなかつた事にしてあげよ。」

「行くぞ」

「「「「せうー。」」」

8話（後書き）

課題が・・・、課題が襲つてくる・・・。

感想・評価などをお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5641w/>

魔法の世界に来た死神

2011年11月27日13時16分発行